

念願のアイアンマンになれた

下田智明（鳥取県）

「五ツイ!!」というボランティアの声が聞こえた。ふと時計に目がい。暗闇の中で腕時計のライトをつける。スタートして11時間21分後を指している。五ツイコール八。か、キロ5分ていくと11時間台でゴールできるかも知れない。もうひと息だ、がんばろう。ゴールでは応援の人々と万歳をしよう。もう少しでアイアンマンになれるんだ。やっとここまできたんだ。そんな思いが次々と頭の中を駆けめぐり、胸がジーンと熱くなった。心の底からこみあげてくるものがあった。

二年前に始めた毎日の早朝ランニング。その頃は水泳は百がやっとならなかつたし、ロードレーサーにも乗っていなかつた。それが今、こうしてアイアンマンになろうとしているとは。予想すらしなかつたことである。しかし、早朝ランニングを始めたその年にホノルマラソンを完走し、それからのトラ

イアスリートへの道は思いがけずとんとん拍子に進んでいた。日本、宮古島にはふられたもの、びわ湖に初挑戦。台風の中、最悪のコンディションという状況でなんとか完走した。その後は’85、’86年の皆生、’86年宮古島、びわ湖を経てハワイへの出場権を獲得した。

長い一日だった

レース当日。快晴、エメラルドグリーン、絶好のコンディションである（ただ、自転車とマラソンでは暑くなるだろうなと一抹の不安をおぼえたが）。ゼッケンを書いてもらいスタート地点に立つともう心は宙に浮いていた。さあ、いくぞ!と気合いを入れる。まもなく号砲と「ウォー」というまわりの大歓声に刺激されて、自分も「ウォー」と叫びながらこぶしをあげてスタートした。

水泳は、私にとって最も苦手な種目であるので、あせらずさわがず、スローペースを保った。海は透明度がバツグンで、宮古島の海に負けず劣らずとても美しい。魚が泳いでいるのがハッキリ見え、自分も魚になったような気分になる。高石ともやさんの「人は海に生まれて、波に揺られて眠り……」という歌詞を思い浮かべながら泳いでいると、身も心もコナの海に溶け込んでいくようであった。水泳では殴られる、蹴られるのを覚悟していたのだが、予想に反し快適に泳げた。特に折り返して後半は、まわりに人が見えなくてコースを間違えたかと思うほどであった。それもそのはずで、後で水泳の順位を見たら900番台と、最後尾の方を泳いでいたのである。そんなことはつゆ知らず、水泳をフィニッシュ。タイム・1時間37分を「まずまず」と自己満足しながら自転車へ……。そういえば自転車はほとんど残っていなかったようだ。二種目の自転車が一番不安だったのは、体力よりもまずパンクであった。コースの下見で「コナの風は強いから溶岩のカケラが飛

んでくるよ」とおどかされていたので、より一層不安がついていた。しかも私のバイクは前後輪の大きさが違うホイールのファニーバイクなのだ。そのためコナで新品のチューブラータイヤを一本購入し、全部で四本用意。二本を自転車に、残り二本をウェストバッグに取り付けて万全を期した。これでいくらか気持ち楽になった。コナの町を声援に励まされながら、自慢のファニーバイクでカッコよく駆けぬけてゆくと、そこはもう延々と続く恐怖の溶岩地帯であった。行けども行けども同じ景色ばかりでいいかげんに退屈していったところ、ようやく建物が見えてきたと思いきや、今度はダラダラと続く上り坂。この頃になつてトップグループとすれ違うようになった。トップはやはりダントツでデイブ・スコット。その後、少しして二、三台、あとは次から次へ。誰が誰だかわからなかつた。折り返した自転車は、下り坂なのでビュンビュンと気持ちよさそうに飛ばしてくる。それを横目に、折り返しはまだかまだかと坂道とコナ・ウインドの二重苦に行くてをはばまれながら登って行った。

ようやく折り返しがみえると、やっと登り坂が終わったんだあ”とホッとした。

しかし、平坦な道に出てもギラギラと輝く太陽の照り返しと果てしなく続く単調な道に悩まされ、まるで自分が砂漠のまっただ中を

さまよっているように思えた。その中で唯一のオアシスとなったのがエイドステーション。このボランティアたちは、やはり本家本元らしく、ボトルや食物を渡してくるタイムミングがとってもいい。

それに道路が広く直線なので細長くエイドステーションが設置してあり、取りそこねても、また取り直しができた。コナの町まであと十^キぐらいの場所であわただしいヘリコプターの音がして、まもなくトップのデιβ・スコットとすれ違った。彼はマラソンでも依然としてトップを堅持している。私

がまだ自転車を二〇^キ余り残しているというのに、もうマラソンの折り返し付近(二五^キ)まで来ているのだ。2位の選手は?と目をやったが、すぐにはやってこない。だいぶ遅れてティンリーが見えてきた。かなり疲れている様子であ

った。コナの町へ入るころになると、今度は日本人のトップグループと続々とすれ違う。まず城本、続いて山本、梅沢、飯島、毛利:予想どおりのメンバーだった。

最後のマラソンは、三種目の中では比較的得意とする種目だ。歩かなければ、たとえエイドステーションで立ち止まっても、4時間30分以内でゴールできるだろうと思っていた。

一番の難敵は暑さであった。前半は押さえぎみに、エイドステーションでは水をしっかりとかぶりながら走る。マラソンのエイドステーションは一軒ごとの短い間隔で設置してあり、非常に良かった。ことにコナの町を出てからは人気がない溶岩地帯を走るので、エイドステーションのボランティアの声援だけが心の支えだったのだ。日本語のできるボランティアや小さな子供のボランティアもいてとても親しみやすかった。マラソン・スタートのコナ・サーフ・ホテルからコナに至る間に、もうトップのデιβ・スコットは、8時間30分を切る好タイムでゴールしていた。私はといえば、コース上には

距離表示がなかったのも、自分の足どりと時計を頼りにおよその距離を考えながら走った。

ゴールに近づくほど元気に

やがて日射しが柔らかくなる頃、水平線に沈む夕日を右手に見ながら、ゴールはどんな風にして入ろうかといろいろ思いをめぐらした。”とにかく今度は進めば進むほどにゴールが近くなる”、折り返しはもうないんだ”とそんなことも考えた。まだ折り返し点に向かっていている日本人とすれ違うと”あと〇分くらいで折り返し点ですよ。ガンバってください”と声をかけながら、自分の足どりの軽くなった。もう、あたりは真暗闇。螢光スティックをもらい腰につけて走り続けるだけだ。不思議と足は痛まない。体力もまだまだあった。闇の中をいくつもの螢光スティックが、まるでホテルのように行きかった。そのホテルの中をぬうように、私のホテルは快調にとばした。もうすぐ完走できるんだ!””や”と真のアイアンマンになれるんだ!””そんな思いでいっぱいであつた。

「五^分!!」と声をかけられてからコナの町らしい明かりが見えるまではさほど時間を要しなかったが、その明かりが見えてからコナの町にたどり着くまではとても長く感じられた。コナの町へ入った時はスタートしてから12時間(午後7時)を過ぎていた。11時間台の夢は破れたが、それでも予想を上回るペースである。上出来だ。”あとは、ゴールまでの時間を楽しもう!””そんな気持ちであつた。食料品を買った「タニグチスーパー」(コナ・コースト・ショッピング・センター内)の前の下り坂を駆けおりる。左へカーブして声援の人に手を振る。ゆるやかな上りを最後の力をふりしぼって駆け上がり右へカーブ。今度は下って、もう一度右へカーブ。いよいよメイン・ストリートだ。ゴールまで四百メートルだ。左右の歓声に手を振りながらゴールへ向かった。モクアイカウア教会の前を過ぎると歓声もひととき大きくなった。見え見えだ! ゴールだ!!

思わず道路わきに設置されているスタンドの応援席の方に駆け寄った。特に知っている人がいたわ

けでもなかったが、応援してくれている人々と、誰かれかまわず全ての人と手を合わせた。野球でよくやるホームランの出迎えシーンのように。
 バシッ、バシッ、バシッ！
 思いきり手を振り落とした。『万歳』のことはどこかへ忘れてしまっていた。
 “やった！やった！”とにかくやったんだ！！
 “ありがとう！ありがとう！”応援をありがとう！！
 “ただ、ただ、そんな気持ちで思いきり手を振り落とした。最後は右手を高く突き上げてゴールイン！！12時間10分47秒だった。‘アイアンマンだ！’とうとうアイアンマンになったんだ……！！”

月刊誌「トライアスロン JAPAN」1987年1月号に掲載

見通しのよいバイクコース



誰もが感激するフィニッシュ